

別紙 1-1

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	乙	第	号
------	---	---	---	---

氏 名 鈴木 富雄

論 文 題 目

National survey of international electives for global health
in undergraduate medical education in Japan: 2011-2014

(日本における卒前医学教育における海外臨床実習に関する
全国調査：2011-2014)

論文審査担当者

名古屋大学教授

主 査 委員

粕谷 莫樹 

名古屋大学教授

委員

松田 志之 

名古屋大学教授

委員

濱嶋 信之 

名古屋大学教授

指導教授

粕谷 雅文 

論文審査の結果の要旨

別紙 1-2

今回、2011年から3年間に渡り、全国80大学に対して28項目の質問紙調査を行い、海外臨床実習に関する大規模データを得た。毎年70前後の大学が約800名弱の学生を海外に送り出し、6年生で単位交換が可能な4週間を一つの区切りとして行う形が主流となっていることが明らかになり、本邦の卒前医学教育における国際交流の進歩が示された。留学先は欧米が約7割を占め、アジアの中での日本の国際的な役割やグローバルヘルスの観点からの幅広い学びの機会獲得という点から考えると、非欧米諸国への留学を積極的に推奨していく必要性も示唆された。

本研究に対し、以下の点を議論した。

- 1、 アジアでの臨床実習を行った学生及び卒業生による貴重な学びの発表と共有の機会を増やすこと、アジアで質の高い教育機会を提供できる大学との提携を積極的に結ぶこと、公衆衛生分野のカリキュラムの中に、グローバルヘルス関連の魅力的な授業を展開することなど、学生に非欧米諸国も含めた広い意味での国際交流の重要性に気づかせ、自分自身のキャリアに照らし合わせて考える機会を増やしていくことが重要である。
- 2、 入学時からの6年間を通じての国際交流に関する系統的なカリキュラムの推進、提携校のさらなる確保、経済的・教育的な支援の増強などが求められるが、現時点では大学間の格差が顕著であり、先進的な取り組みを行っている大学が学会、論文などで積極的に成果を発表していくことも重要だと考えられる。
- 3、 海外臨床実習での到達目標をある程度高く掲げるのであれば、言語的ハンディをも考慮すると、国内での必修診療科目の臨床実習終了後が望ましい。現在本邦では5年生の学内主体の実習で必修診療科目の単位修得を行い、6年生の実習で国外も含めての選択臨床実習を行う大学が多く、医学部のカリキュラム上のバランスを考えると、現在主流となっている6年生の4月から7月までの時期が、最適であると考えられる。

本研究は、卒前医学教育における海外臨床実習に関する重要な知見を提供した。

以上の理由により、本研究は博士（医学）の学位を授与するに相応しい価値を有するものと評価した。

別紙 2

試験の結果の要旨および担当者

報告番号	※乙第	号	氏名	鈴木 富雄
試験担当者	主査	相谷 晃樹	おとふみ	濱嶋 信之
	指導教授	葛谷 祥文		

(試験の結果の要旨)

主論文についてその内容を詳細に検討し、次の問題について試験を実施した。

1. 学生の北米志向が強い中、アジアへの志向性をはぐくむ方法について
2. 本研究結果を踏まえて、卒前教育における国際医学交流の推進方法について
3. 海外臨床実習の時期について

以上の試験の結果、本人は深い学識と判断力ならびに考察力を有するとともに、総合診療医学一般における知識も十分具備していることを認め、学位審査委員合議の上、合格と判断した。

別紙 3

学力審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※乙第	号	氏名	鈴木 富雄
学 力 審 査 担 当 者	主 査		松谷 雅文	松田 五三
	指導教授		松谷 雅文	濱嶋 信之
<p>(学力審査の結果の要旨)</p> <p>名古屋大学学位規程第10条第3項に基づく学力審査を実施した結果、大学院医学系研究科博士課程を修了したものと同等以上の学力を有するものと学位審査委員合議の上判定した。</p>				